

温泉たまご

朝比奈華・あさひなはる 女性・30歳 人生全般で悩み中。仲良しの義理姉・千絵に相談も兼ねて金土日で実家に弾丸帰省をする。

朝比奈類・あさひなるい 34歳 華の兄 1年前に実家の温泉旅館「山の湯」を継いだ若き社長。昔は不良少年。サムエルをはいた接客姿が女性客に密かに話題。

朝比奈千絵・あさひなちえ 33歳 類の嫁。華の頼れるアドバイザー。1年前に一のUターンをきっかけ初の田舎生活へ。当初は慣れない環境に眠れない日々が続いていた。

朝比奈美奈子・あさひなみなこ 62歳 華・一の母親

朝比奈毅・あさひなたける 64歳 華・一の父親

○平日・東京駅。せわしない人混みの中を女性・華（30）が片手にキャリーケース、背中にリュックを背負いながら八重洲口方面へ歩いている。改札を出ると目の前の大丸へ。賑やかなお土産売り場をキョロキョロ何かを探しながら歩いている。ガラスケースの中には凝ったケーキやバウムクーヘン、美しいワッフル、キュートなチョコ菓子等、心が躍る品々ばかりで華も楽しそう。『あっ』と小さくつぶやき華は和菓子のお店で立ち止まる。しばらく迷った後に5個入りの最中を購入。華は満足した表情で、店員さんから紙袋を受け取っている。

○新幹線・車内。窓際に華が座っている。窓に映る景色は都会のビル群からやがて山や海、田んぼなど豊かな自然へと移り変わる。イヤホンをして窓枠にひじをつきじっと外を見つめる華。

○駅（夕方）。ホームに新幹線が到着。開いた扉から、荷物を抱えて次々と人が降りていく。その中に華がいる。改札口を出てすぐに千絵（華の義理姉・33）を見つけるとにこりと笑う。千絵も微笑む。

千絵「おかえり、華ちゃん」

華「ただいま」

千絵は華のキャリケースを黙って受け取り、先を歩く。華も続く。

○車内。千絵が運転している。助手席には華。

千絵「日曜は何時の新幹線で帰るの？」

華「東京に20時過ぎに着くやつだからー、こっちは18時頃発かな。」

千絵「そっか、ばたばたしちゃうね」

華「そうだねー、二泊三日。お世話になります」

千絵「はいはい。あ、美女と野獣借りておいたからどっかのタイミングで観よう」

華「ありがと〜。」

千絵「で？仕事は相変わらず辞めたい感じ？」

華「あーうん、変わらず。部長の圧がすごくてしんどい」

千絵「部長はクソ過ぎるよね、華ちゃんの部署。反吐がでるね」

華「みんなでてる。昨日とか在宅ワークだったんだけどさ、もう一生来なくていいって皆言ってた。」

千絵「部下に嫌われる人生も気の毒よなー」

華「全然。」

千絵「まあ、でもそんなクソ部長に振り回されなくてもいいじゃんとも思っちゃうけどね。そんな奴を理由に悩むなんて勿体ない。」

華「そうなんだけどさ。存在がもうね〜・・・はぁ〜」

千絵「まあさ、三日もあるし、大いに話そうじゃないの。」

華「うん、大いに聞いておくれ」

二人を乗せた軽自動車（白のラパン）が中央道を走っている。車道にはパチンコ店や大型ショッピングセンター、ガソリンスタンド、本屋が連なっている。地方のよくある風景。やがて車は中央の車道を左に曲がり、くねった細い道を進む。すれ違う車も減っていき、家と家の間隔が広がってきたころ、ようやくラパンは一軒の家の前に止まる。駐車場には他に自動車が2台と、小さなバケツや二輪車が見える。

○朝比奈家・食卓（夜）。夕ご飯。大きなテーブルを囲んで、華・千絵・毅（たける・華の父）・美奈子（みなこ・華の母）・夏南（かな・千絵の娘2歳）・芽唯（めい・千絵の娘5歳）・多恵子（たえこ・華の祖母72歳）がいる。品数が豊富で賑やかな食卓。酒も進んでいる様子。

華「はぁ肉美味しい。いくらでも食べられる」

美奈子「食べて食べて。いっぱい買っちゃったからね。サラダも食べてね」

華「はい。あ、類兄さんは今日も遅いかな？」

千絵「今日は帰ってこないよ、当直の日。」

華「兄さん、当直もやってるの？」

千絵「うん、先月からね。ほんと人足りてないみたい。」

華「そうなんだ・・・」

華は心配そうな顔をしながら、カボチャの煮物を口に運ぶ。

美奈子「それでね、明日温泉泊まるのよ、華ちゃんもいくでしょ？」

華「へ、そうなの。類兄の雄姿も見に行くの？」

千絵「それも兼ねてる（笑）」

毅「僕はお留守番だけどね。まあゆっくりしておいでよ。とつつつお客として厳しく観察もしてきて。それをまた類に言ってやってよ」

華「ふうん、分かった。めいかなも一緒？」

めい「めいもー」

かな「かなもー」

めいとかなは口をもぐもぐさせながら楽しそう。

華「そっか、兄さんも喜ぶね」

千絵「どうだろ。忙しくて会えないかもだけど」

千絵は少し寂しそうな顔。

カチャカチャと食器がぶつかる音や千絵の子供たちに向けた声やテレビの音、大人たちの会話と雑多に響いている。

○朝比奈家・リビング（夜）。華はPC、千絵はスマホをいじりながら会話している。二人はソファには座らずカーペットの上に座り込んでいる。テレビ画面には美女と野獣が流れている。

華「なんかHP 凄い変わったね。見やすい。そしていい感じに盛れてる、この写真とか」

華は「山の湯」のHPを見つめながら話している。そこには、露天風呂の様子やそこから見える山景色が映っている。

千絵「あ～そうなの、画面全体湯気っぽくしてぼやけさせてるの。類の大学の後輩につくってもらったんだー。」

華「へえ～。兄さん凄い頑張ってるじゃん。」

千絵「まあ、継いじゃったからね。兄さんなりにあれこれ考えてるみたいだよ。まあそれはいいんだけどさ、休みが週に1回あるかないかなのは勘弁してほしい。」

華「あー休めてないんだ。可哀そうに。」

千絵「でも私も大変だもん。めいとかな一人で相手しないといけないんだから。」

華「あ～二人とも最近は動くもんね、目が離せないよね。確かに疲れそう・・・」

千絵「で、華ちゃんは？いっそ帰ってきなよ？こっち。」

華「でた、千絵ちゃんの帰りのコール。まあそれも考えてる。」

千絵「ふうん。つい先月までは今にも帰りたかって感じだったのに、悩むってことは何かあった？」

華「流石鋭い・・・。特に何も無いけど、考えてみたら帰ったところのことないし。」

千絵「それもそうね。」

華は「ああ」と声をだしながら後ろのソファに倒れクッションに頭を突っ込む。

○翌日。山の湯(夜)。601号室。華・千絵・美奈子・めい・かなは浴衣姿で食事をとっている。テーブルの上には刺身の盛り合わせ、天婦羅に茶碗蒸し、しゃぶしゃぶにステーキと豪華な料理が並んでいる。めいとかなの前にはお子様セット。

類「うっす。」

襖があき、最後のデザートをお盆に乗せ類が入ってくる。

華「あ、兄さん。」

めい・かな「パパちゃんー」

めいとかなが立ち上がり類にまわりつく。それをうまくかわしながら類がデザートをテーブルに置いていく。

類「これで最後だけど足りた？お代わりとかなんかある？」

美奈子「もう十分。あ、ビールだけもう一杯」

類「飲みすぎだよ・・・最後ね。」

華「兄さん配膳もするんだね〜。」

類「おれはなんでもするよ、受付からシフト管理、面接から送り迎え、窓ふきからカラオケまでなんでも」

千絵「カラオケね（笑）この前、団体のお客さんに無茶ぶりされたんだって。それをさ、フェイスブックでそのうちの誰かが上げたらしく結構話題になったの。歌が上手すぎる湯守さんって。この話したっけ？」

華「いや聞いてない。でもそうやって話題になって拡散されるのって今っぽいね。兄さんやるじゃん。」

類「ふん。たまたまね。んじゃ、俺はもう行くけど。ビールは頼んどく」

そう言って類は千絵の前にあるビールを一気に飲み干し、「じゃっ」と去っていく。

華「兄さん忙しそうだね」

千絵「ねー」

○翌朝。山の湯・朝食会場。大きなガラスから見える雄大な山景色を背景に、家族連れや夫婦・団体客がにぎやかに朝食をとっている。バイキング形式で和食がメイン。テーブルを確保したのちに、華はめいと一緒に物色している。

めい「あ、パパちゃん」

めいが声をあげる。視線の先を追うと、類が大きな炊飯器の前でごはんをよそっている。4, 5人の列ができていますが、類は一人一人に「おはようございます」と声をかけ、会話をしながら丁寧にごはんをよそっている。お客さんにもこやかで楽しそう。

華「今度は給食のおばちゃんしてる。兄さん底知れないわ・・・」

華はつぶやく。めいと一緒に列に並ぶことにする。類とお客さんの会話が聞こえる。

類「おはようございます。」

お客さん（女性・年配）「おはようございます。あのね、昨日教えていただいた通り早朝、露天風呂行ってきたの。あなたの言う通り、素敵だったわ、早朝の山景色。段々色が変わってゆくのね、朝日が昇るにつれて。しんと静かで。少し肌寒いからお湯が気持ちよくて・・・。また、絶対くるから。」

華はその言葉を聞いて目を見開く。

類「ありがとうございます。僕もあの時間がすごく好きなんです。是非またいらしてください。お待ちしております。あ。温泉たまごもありますからお好きにどうぞ」

お客さん「まあ嬉しい。」

お客さんは微笑みながら小皿に入った温泉たまごを一つ選び、楽しそうに去っていく。華は黙ってその様子を見つめていた。めいに手をひかれ次が自分の順番だと気づく。

めい「パパちゃん、おはよう」

類「おはよう。良く寝れたか？」

めい「寝れたー」

華「おはよう。兄さんは寝れた？昨日も遅かったんじゃないの？」

類「んーまあ慣れたかな。これくらい？」

類は茶碗によそったご飯の量を華にみせる。

華「うん、ありがとう。」

類「あ、今日急遽、小木曾さんが夕方からシフト入ってくれるらしく、俺早めに帰るから。  
千絵に伝えといて」

華「そうなんだ、了解」

華は温泉たまごの入った小皿を二つ選ぶとお盆にのせ、皆が待つテーブルへと歩いていく。  
類の次のお客さんに向けた「おはようございます」の声が聞こえる。

○朝比奈家・リビング（夕方）。華と千絵はソファに座りそれぞれスマホをいじっている。  
めいとかなはカーペットの上でおままごとに夢中。

千絵「バタバタしちゃってやっぱりそんなに話せなかったね、華ちゃんの今後の話（笑）。  
まあ、ラインでも電話でもしてよ、また闇に入ったらさ。」

華「うん、そうする。ありがとね。」

千絵「結局さ、選択肢がありすぎるよね、今の華ちゃんは」

華「ん？」

千絵「今の仕事を辞めるのか、続けるのか、彼氏とこのまま付き合うか、別れるか、こっ  
ち帰ってくるのか、東京に居座るか、それとも知らない場所に行っちゃうか、はたまた放  
り出してやけになるか」

華「最後（笑）」

千絵「つまりは選択肢があるから悩むわけで。それってある意味幸せで、ある意味酷だよ  
ね。ここしかないってなったら覚悟がつくみたいよ。類みたいに」

華「・・・」

千絵「覚悟決めてから類は悩んでないよ。悩むより考えて、前進してる。」

華「・・・」

千絵「何言いたいかわかんないけど、まあいつかはここだってゆう場所を華ちゃんも見つ  
けられたらいいね。まあ私もだけど。」

華「そうだね、ほんとに。」

華はスマホを放り出すと、ソファに倒れこむ。

華「朝、兄さんの接客見ててびっくりした。あんなに流暢に会話して、お客さんの心つかんで、プロかよって思った。たった1年なのに。アフロでタバコくわえて、ギター鳴らして叫んでた兄さんが懐かしい・・・。」

千絵「アハハ！ 類にそれ言ってあげてよー。接客について相当勉強してたもん。喜ぶよ、でもまあそうなの、1年もあれば人は変わるよ」

○朝比奈家・玄関（夕方）。華が帰り支度をしている。そこへ類がちょうど帰ってくる。

めい・かな「あ、パパちゃん」

類が自動車の窓を開ける。

類「おう、今帰るところ？このまま送ってくよ」

美奈子「あら、そう？ありがとう。」

千絵「ついでに牛乳買ってきて！華ちゃん、またね〜」

華「うん、また〜。兄さんよろしく〜」

華は荷物を抱え自動車の後ろの席に乗り込む。類の自動車がゆっくり動き出し、駅へと向かう。

華「あ！ちょうど良かった。すっかり忘れてた、ハイ」

華はキャリーケースから紙袋を出すと、運転している類に渡す。

類「お、なに？」

華「最中！兄さん昔から好きでしょ。大丸で美味しそうだったから買ってきたの」

類「いーね〜最中うまいよね。」

類は助手席に受け取った紙袋を置く。

華「美味しかったらまた買ってきたげるよ」

類「サンキュ〜」

華「最中だけで嬉しそうだね」

類「そんなもんよ。てかさ、接客やってると人ってマジ些細な事で喜ぶんだなってびびるよ」

華「へえ、例えばどんな？」

類「それこそ温泉たまご一個とかね」

華「そうなん？朝の？」

類「そうそう。何を朝からってゆうくらい険しい顔したおっちゃんがさ、温泉たまごみつけると子供みたいに嬉しそうに顔した時あって、鳥肌たったわ。あんなんすぐに作れるし、コンビニでも売ってるのに」

華「たしかに」

類「それからついこの前。去年も来てくれたお客さんがまた来てくれてさ、嬉しくてあの日は雪が積もってましたね、なんて言ったら覚えてくれてるの！なんて感動してくれて。その日大雪で大変だったからたまたま記憶にあっただけなんだけどさ。そのまま次の予約もいれてくれて。」

華「ふうん〜すごいじゃん」

類「そういう小さなちい〜さな喜びポイントがたまあ〜にあるんだよね、仕事してると」

類は右手でハンドルを操作し、左手で小さな円を作る。

華「うん」

類「だからそんなことも知らず、やれ辞めたいだの、やれ上司がクソだの言ってる華みてるよとひよっこだな〜って思う。まだ仕事の醍醐味知らねえんだ、へえ〜って」

類はケラケラと話す。

華「・・・なるほど？」

華は後部座席から身を乗り出して類の顔をのぞく。

類「今後お前がどうするのか知らないけどさ、お前も小さな喜びポイントに出会えるといいな。ま、お前次第かな。」

ちょうど信号が赤になった。類は「よっしゃ」とつぶやき、華のお土産をガサガサと開けると最中を一個取り出して口に放り込む。

類「うめー！」

華「・・・よかった。」

華は後部座席に座りなおすと窓の外を眺める。見渡す限りの山々と夕暮れがきれいに映えている。

華「・・・私も探してみる、喜びのポイント」

類「ん？うん、喜びポイントね」

華「どっちでもいいよ」

華が笑う。

やがて信号が変わり車が駅へと向かっていく。